

同期生の皆様いかがお過ごしですか。竹田範弘です。昨年3月に8年間の会社勤めをやめ、5月末から夫婦でフィリピンにボランティア活動に行ってきました。NISVA(技能ボランティア海外派遣協会)という日本財団の海外協力援助事業の一環をなす団体から派遣されました。岳父が動けなくなり入院したため、活動を早めに終了させてもらい今年2月に帰国しました。見たこと・感じたことを少し書かせていただきます。

ルソン島北部のパンガシナン州スワル市というところに行きました。日本軍の進攻時と米軍の反攻時に上陸地であったリングエン湾南端の海に面した半農半漁の町です。「手に職をつけて収入を得させる。」という市のプロジェクトへの協力で、家庭の婦人達に縫製技術の指導をするのが妻の役目で、私は彼女達を作っている組合(association)の組織強化の指導をしました。今年も大統領などの選挙が終わった6月から後任の方が行かれて継続しています。

縫製指導は妻が3人目のボランティアでした。前任者の努力で既に日よけ帽子や布製バッグを商品として作っており、妻はブラウスやズボン(パンツ)作りなどを新たに教えました。私の組織強化の指導は、会社と組合の違いというところから始まり management や marketing の基本に及びましたが、商売の経験はないので東京の事務局などに教えてもらいながらやりました。指導したものが商品に発展することと組合活動が活発になってゆくことを願っています。

ルソン島北部は気候が規則的なところですが、6月から10月は雨季でその後は乾季でした。雨季は毎日のように激しい雨が降りますが長い時間は続きません。気温も日本の真夏程度で湿度も約75%以下でしたので、身体を慣らすのは楽でした。乾季は殆ど雨が降らず風もあり気温も下がってしのぎやすくなりました。4月・5月の強い暑さを経験できなかったのが少し残念です。

衛生状況は私達が子供の頃の日本の農村などと大体同じ感じでした。予防注射もして行きましたが、私も妻も水当たりと思われる腹痛と風邪ひきが1~2回のみで元気に帰国できてよかったですと思います。水道水は飲めず、あちらの人達も水を缶で買って使っています。身の安全は、この地方では注意すれば大丈夫でした。往復時のマニラ地区通過のみは細心の注意を払い、あちらの人も心配して送迎してくれました。

言葉ですが、あちらの人達がバイリンガルなのには驚きました。スワルでは、

その地方のイロカノ語と標準語とされているタガログ語を話し、それに英語で日常会話ができます。英語は上等？ではないですが、私達より上手でした。フィリピンから多くの人が世界各地に出稼ぎに出っていますが、英語ができるのが受け入れられる理由の一つのようです。それから携帯電話が普及していて、多くはノキアなどの4,000円前後のものを使っていますが、安価なメールの送受が上手で会話はあまりしません。色々の略語などを駆使しての巧みな送受文には感心しました。

フィリピンの人達ですが「優しい」という思いがしました。家族や親族に対して特にそうです。とりわけ子供に対する優しさが目立ちました。これらのことは頼り過ぎや甘やかしという反面のことも言えるのですが、日本人が忘れかけている一面でもあるような気がしました。またルソン島はマレー系の人が多いのですが、階層間のことは別にして人種的な偏見はないように感じました。また子供が多く日本の少子化のことを考えさせられました。豊かさや子育ての大変さの感受性は違うと思いますが、それだけでないものも感じました。

それから、意外と言えれば失礼ですがあちらの人達はきれい好きです。暑いこともありますが日に何度かシャワー(水浴び)をします。人ごみの中でも体臭を感じることはありませんでした。大事なお客さんが来た時に、待たせてもシャワーをしてから出て会うということもあるようです。家の前や道路など朝から掃き掃除をしています。

日常の足はバスとトライスクル(オートバイのサイドカー)です。見かける車の殆どは日本製で中古が多いです。バスも傷んだ程度により運賃が違います。よくまあ走るものだと思うのですが、信号もないので飛ばして追い越すのですから驚きです。またトライスクルが多く、誰もがすぐ乗ります。もう少し歩けばよいのにと思うこともありました。

縫製に来ている人達(メンバー)の殆どは30歳・40歳台の人でした。熱心に取り組み素直でまじめにやるのですが、おしゃべりが大好きで、時には音楽をかけながら手を動かしていました。また大人も子供もおやつを食べるのが習慣で10時頃と15時頃は大体何か食べたり飲んだりします。昼食は一緒に弁当を食べたのですが、彼女達のものは主食のご飯はたくさんですが、おかずは少なく、よく汁(スープ)をかけて食べていました。今の日本人から見れば貧しく見えるかもしれませんが、彼女達はそうは思ってなく、楽しく毎日を過ごしていると

いう感じでした。直ぐに反応しなければやる気がないと思うのは早計で、やる時にはやるという一面を見たこともありました。

色々の思い出がありますがこのくらいにします。私達は行く時に「フィリピンではよい点を学ぼう。」と思い、そのように努めました。物質的に日本が優れているのは自明のことですぐに分かりました。しかし帰国する頃は「フィリピンにいるからでなく世界中で日本というのが特殊なのだ。」という感じもしました。また国民性はちがっても、人として向き合う時には心は通じるという思いもしました。あちらの人達に「日本人は金持で一目置く。」という感じがあることも分かりましたが、私達は心して対等に付き合うことを通しました。そうしないと知らぬうちに思い上がり、何のためにボランティアに来たのか、ある意味で墮落すると思ったのです。

最後になりますが、フィリピンには50万人余の日本人戦没者が眠っています。一度バギオに行き追悼碑におまいりしましたが、車中などから山野をながめる時には心の中で手をあわせておりました。

次のページから写真7枚を添付します。ご覧いただければ幸いです。また、何かお聞きになりたいことがありましたらどうぞご一報下さい。

01 スワルに着いた翌日の私（最初にお世話になった日比NPOのCFF孤児院の宿舎）



02 ブラウス作り指導中の妻



03 組合組織について講義中の私



04 出来上がったブラウスを着て集合したメンバー



05 スワルの海(CFF 孤児院からの眺め)



06 スワル近郊の田園風景(11月、2回目の稲が植えられています。)



07 クリスマスパティーで揃いの「甚平」を着て踊るメンバー
(妻も一緒に参加しました。)

